

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：32682

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580132

研究課題名(和文)唐宋時代の「巡礼」と移動をめぐる社会史的研究

研究課題名(英文)A Socio-Historical Study of Pilgrimage and Migration during the Tang and Song Dynasties

研究代表者

気賀沢 保規 (KEGASAWA, YASUNORI)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員(客員研究員)

研究者番号：10100918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国史上の「巡礼」がいつ頃登場するか。本研究は巡礼史料の集約と考察から、幾つかの成果を出した。

1)「巡礼」は唐代に現れ、9世紀前半に盛り上がった。だがそれは会昌の廃仏で衰退する。ここから廃仏の背後に「巡礼=移動」に対する国家の危機意識を読み解いた。2)敦煌壁画の五台山図は、9世紀前半の五台山巡礼に刺激を受けて描かれた。その原図は長慶4年(824)の唐吐蕃会盟の結果、吐蕃に渡った。3)巡礼は9世紀の後半に再び活発化する。この事実を宋代巡礼の広まりに繋げると、巡礼は唐宋変革に関わる課題となる。4)その他『新編唐代墓誌所在総合目録』『房山石経巡礼題記資料集』『古清涼伝翻訳』などの整理と刊行を行った。

研究成果の概要(英文)：When did “pilgrimages” first appear in Chinese history? This study made following findings.

1) Pilgrimages appeared during the Tang dynasty and reached a peak in the early 9th century. However, they declined after the anti-Buddhist persecution of the Huichang era. So we can interpret that Tang dynasty had a sense of crisis to “equated pilgrimage with transfer”. 2) The painting of the murals of Wutaishan at Dunhuang were stimulated by pilgrimage to Wutaishan in the early 9th century. The original image was the result of the Sino-Tibetan Peace Treaty that ceded the territory to the Tibetans in Changqing 4.

3) Pilgrimage experienced a revival in the latter half of the 9th century. When this fact is linked with the Song, pilgrimage becomes an issue in the upheaval that marked the Tang-Song transition. 4) There was additionally publication of New edition of the comprehensive catalogue of the location of Tang-dynasty epitaphs, Collection of source materials on the inscriptions of stone sutras at Fangshan.

研究分野：隋唐社会文化史

キーワード：巡礼 房山石経 五台山信仰 円仁 敦煌五台山壁画 石刻資料 参天台五台山記 唐宋変革

## 1. 研究開始当初の背景

8世紀半ばの安史の乱を起点とする唐代後半期から五代を経て宋代におよぶ時期は、中国史における一大転換期として、「唐宋の変革」と総称される。この問題をめぐって過去に内藤湖南以来、日本学界が主導して多くの研究成果をあげてきた。だが近年この論をめぐる研究では、近年とくに日本において衰退気みであり、正面からその時代認識をもち出す状況ではなく、先人が切り開いてきた業績や時代認識も背後に追いやられている。

しかし客観的に考えて、唐後半期から宋代へ展開する時期はまぎれもなく一大転換期であり、さらには中国史だけでなく東アジア史全体にわたる問題である。その観点や認識は近年中国学界で深まり、近年、内藤湖南以来の京都学派の時代認識を自らの側に取り込み、自前の論理に組み換えた時代論を新たに打ち出そうとする動きすら認められる。日本学界としてそれを座視するわけにはいかない。

日本が主導してきた従来の唐宋変革論において、権力・制度の構造、政治や経済の構成、文化や知的領域の特質などが論じられてきた。しかしかねてより、そこでは時代を生きた人々の意識や行動の問題、変革時における精神領域の問題に踏み込めていないと感じてきた。具体的には、申請者は近年、隋唐時代における仏教と社会の問題を研究対象としており、その関心を唐宋変革期に見ようと意識したからである。

そうした立場から唐宋変革期の問題としてたどり着いたのが、「巡礼」行動とそこに凝縮する社会的背景の問題であった。過去の研究で、聖地や信仰対象地を為政者に派遣されて訪れる行動を取り上げたものは存在するが、自発的に信仰（とくに仏教信仰）にもとづいて巡礼する行動を、唐代以前において正面から取り上げられたことはなかった。しかし私たちは、敦煌壁画における五台山巡礼壁画（莫高窟第61窟、これは五代曹氏帰義軍時代）の存在、また日本僧円仁の『入唐求法巡礼行記』が伝える840年当時の唐末巡礼行動の姿、などを知っている。

それに加えて、申請者が最近進めている「房山石経」題記の研究で、多くの巡礼資料が存在することが分かってきた。そこには一般民衆によるまさに「巡礼」と表記される姿が刻印されていた。

以上、唐宋変革論への認識、隋唐仏教社会研究の蓄積による精神領域への関心などの上に、唐代後半期に現れる「巡礼」問題にたどり着くことになった。その時代的な意義、社会的な構造を明らかにしたいというところから本研究は出発することになった。

## 2. 研究の目的

律令制下の中国は、農民を土地に緊縛し、特別の理由がない限り移動を認めない管理された時代であった。だが8世紀半ばの安史

の乱を境として、中央の支配が緩み、地方藩鎮の自立と地方社会の経済力の向上が進むなかで、人々は国家の頸木をはずれて主体的に移動をし始め、唐朝の足元を掘り崩し、その結果が唐の滅亡と宋の興起という大転換につながった。

そして当時、この高まる「移動」という動向を象徴したのが、「巡礼」という宗教的仏教的信仰行動であった。中国史における「巡礼」行動は、従来正面から問題にされることはなかったが、申請者が近年、「房山石経」の題記を整理する中で、9世紀の巡礼の様相が見え始めた。本研究はそのことを手がかりに、同時代の五台山信仰に着目し、日本僧円仁が残した『入唐求法巡礼行記』の分析、また敦煌壁画と敦煌文書における五台山巡礼とその広がりとあわせて、唐代後半期の巡礼を総合的に明らかにする。

また巡礼は背後に「移動」という問題を隠している。巡礼の拡大は移動の問題を露呈させ、権力の根幹を揺るがすものとなる。すると唐代後半期を移動の視座から見直すことも求められる。それが宗教行動と外れて現れるとすれば、「逃戸」という戸籍からの脱出行動に結びつくのではないか。そうした関心から本研究では、巡礼—移動—逃戸という繋がりを意識した考察を進めることとなった。

## 3. 研究の方法

(1)本研究では、当初4つの柱を立て（下記の①②③⑤）、それぞれ並行して研究し、成果のとりまとめに努めたが、研究の進行過程から新たに④の項目が加わり、さらに⑥としての国際シンポジウムを加え、成果の国際発信に努めた。それぞれの方法内容は以下の通りとなる。

- ①「房山石経」の「巡礼」資料の整理と研究
- ②唐代「逃戸」「移動」史料の収集と整理
- ③五台山「巡礼」史料の集約と分析
- ④唐代敦煌（吐蕃支配期）の五台山壁画と五台山信仰
- ⑤唐代の墓誌石刻史料の集約と整理
- ⑥国際シンポジウムの開催

(2)①「房山石経」の「巡礼」資料研究：房山雲居寺の前の石経山には、9つの洞窟に隋唐—遼代に刻された石経(碑)が、碎片も含めると5千点近く収蔵される。それらの資料内容は2000年に刊行された「隋唐刻経」5冊と「遼金刻経 大般若経」1冊（これらは拓本資料集）にまとめられている。しかし經典に関わる以外の石碑類（題記資料）は多くはここには収められず、実物は別途に探すしかない。本研究に関わる「巡礼」関係史料は、右の資料集に一部しか採録されないため、拓本を所蔵する中国の機関にあたり、それらを集約した資料集を作成、あわせて資料の分析を進める。

(3)②唐代「逃戸」「移動」史料の収集と整理：唐代に関わる正史（『新旧両唐書』）や『通典』

『冊府元龜』『唐会要』などの典籍また仏教書(『統高僧伝』『宋高僧伝』)などから、逃戸関係の記事を集積する。並行して敦煌戸籍(池田温編『中国古代籍帳研究』参照)や敦煌・吐魯番社会関係文書を見直し、逃戸の出現・存在様態および移動実態を時代背景とあわせて詳細に分析する。

(4) ③五台山「巡礼」史料の集約と分析：まず円仁『入唐求法巡礼行記』および成尋『参天台五台山記』を「巡礼」の視座から見直すとともに、その他仏教関係典籍から唐代五台山信仰の巡礼記事を集約することに努める。その中で、五台山をめぐる信仰と巡礼と遺跡の姿を伝える唐慧祥撰「古清凉伝」の詳細な訳注稿を完成させ、五台山研究の基盤をつくる。その蓄積の上に、初年度には五台山の現地を詳しく調査・踏破する。

(5) ④唐代敦煌(吐蕃支配期)の五台山壁画と五台山信仰：

これは本研究を進める過程でとくに意識されることになった課題であり、具体的にはまず五台山文殊信仰に関わる壁画とそこに込められた吐蕃支配期の敦煌人の巡礼意識と背景を考察する。

(6) ⑤唐代の墓誌石刻史料の集約と整理：唐代社会を明らかにするためには墓誌や碑刻が欠かせない。近年は経済開発や盗掘などによって新墓誌の発見が相次いでいる。明治大学東アジア石刻文物研究所のもとで、『新編唐代墓誌所在総合目録』や『東アジア石刻研究』誌を刊行し、また1990年代以降の中国文物考古関係雑誌を整理し、新出石刻資料目録を作成する。

(7) ⑥国際シンポジウムの開催は研究成果欄で報告する。

(8) 以上の成果の上に、唐宋代の社会転換論、唐宋変革論への考察を進め論稿を発表する。

#### 4. 研究成果

(1) ①「房山石経」の「巡礼」資料研究に関わっては、巡礼資料を中国国家図書館善本部と連絡を取り、必要なものはほぼ入手できた。それをふまえて、「房山雲居寺石経題記資料集稿一「巡礼題記」拓本・録文・考察篇一」を報告書として完成させた。これは関係機関・研究者に配布する。これは資料(拓本・録文)と考察(房山石経と巡礼)からなり、巡礼研究に貢献できると考える。全体でA4版・160頁となる。

また研究で得られた成果は、学会発表や招待講演などで発表し、評価を得ている。

(2) ②唐代「逃戸」「移動」史料の収集と整理に関わっては、具体的にまとまった資料集の完成までには至らなかった。しかし「巡礼一移動」の問題を会昌の廢仏(845年が頂点)と繋げて、会昌の廢仏の背景を従来、武宗の道教への傾倒、寺院の肥大化腐敗化、政界における反仏教論の抬頭で説明してきたのを批判し、むしろ巡礼の広まりによる民衆の移

動問題に目を向ける必要があることを論じ、「巡礼一移動」論への理解を深めた。「逃戸」「移動」の史料集作成とその考察は現在も継続中であり、この一両年に刊行・報告ができるように努める。

(3) ③五台山「巡礼」史料の集約と分析では、まず円仁『入唐求法巡礼行記』において史料の全把握と、それに基づく考察・研究発表・講演は何度か行った。この分析を通して、会昌の廢仏前夜の840年段階では、五台山に多くの民衆が団体で「巡礼」していることを明らかにした。そしてこの事実は、じつは①の房山巡礼からも確認できた、ここから武宗が会昌の廢仏を断行した裏に、巡礼の盛り上がりという重い現実があったことを見せてくれる。

この他、成尋『参天台五台山記』の考察であるが、本書は大部なこともあり、現在作業が進行中である。ちなみに円仁の旅行記の題名には「巡礼」の語がつかわれるが、これは当時日本でも用語として定着していたことを分らせてくれる。それから当初予定した唐慧祥撰「古清凉伝」の詳細な訳注稿であるが、時間的な遅れからまだ完成できず、現在の予定では1年以内にすべてを終えて、公刊する予定である。

(4) ④唐代敦煌(吐蕃支配期)の五台山壁画と五台山信仰の考察であるが、このうち壁画に関わる部分の考察はほぼ終了し、東洋文庫の研究会や中国の学会などで報告し、一定の理解と評価を得ている。一方敦煌文書の文字資料部分の考察であるが、これも東洋文庫の研究会で報告し理解を得たが、まだ資料把握の完成を見ていない。敦煌では8世紀後半から9世紀半ばまでの吐蕃支配期に五台山文殊信仰が盛んになり、巡礼行動への関心が高まる。その契機を与えたのが821年(長慶元年)の唐・吐蕃の会盟であり、五台山原図としての「五台山図」であったと注目している。これらの成果は近く正式に論文で報告を予定している。

(5) ⑤唐代の墓誌石刻史料の集約と整理であるが、これは『新編唐代墓誌所在総合目録』として公刊できた(発行所：明治大学東アジア石刻文物研究所)。本書の前版は2009年に刊行しているが、そのさいは採録された墓誌が9千点弱であったが、『新編』では1万2千点を越える数になり、さらに広く網羅した前版の誤りも直すことができた。そのため判型も大型にし、A4版で560頁の大部な一書となった。今後の研究に貢献できることを期待している。この他、『東アジア石刻研究』は6号、7号と号を重ね、雑誌としての基盤を確実に形成してきている。

(6) ⑥国際シンポジウムの開催について。本研究では当初から国際シンポジウムの可能性を考えていたが、具体的な日程と対応先が決められず、当初の計画に盛り込めなかった。最終的には中国故宫博物院研究室との研究報告会となり、主に石刻資料をもちいて踏み

込んだ意見交換を行うことができた。そのスケジュールは次のようになる。

- 09:30— 受付開始  
10:00—10:20 開会式  
総合司会速水大(國學院大學)  
全体総括・通訳 梶山智史(明治大学)  
10:20—11:00 講演 氣賀沢保規(明治大学)  
「近代中國の石刻研究の礎を築いた人々  
『新中國出土墓誌』20周年に寄せて」  
11:00—11:40 王素(故宮博物院)  
「南朝宋謝琬墓誌再研究」  
11:40—12:20 高橋継男(東洋大学)  
「唐代における國號〈隋〉字の變化」  
13:30—14:10 小林聡(埼玉大学)  
「墓誌から見る北朝隋唐における南朝系人  
士—理論的枠組の構築に向けて—」  
14:10—14:50 白寧(南京市博物館)  
「六朝時期墓誌特徴淺析」  
14:50—15:30 山下将司(日本女子大学)  
「西安新出「唐・翟天德墓誌」について—  
近年多出する「原石不明墓誌」をめぐって」  
15:45—16:25 任昉(故宮博物院)  
「古代墓誌的材料來源問題  
—古代墓誌材料問題探討之一—」  
16:25—17:05 森部豊(関西大学)  
「唐代奚・契丹史研究と石刻史料」  
17:05—17:35 全体集約と総合討論  
中村圭爾(相愛大学人文学部教授)  
17:35—17:50 閉会式

(7) 「以上の成果の上に、唐宋代の社会転換論、唐宋変革論への考察を進め論稿を発表する」という当初の研究計画であったが、本研究のために別途に為すべき課題が生じ、多くの時間をそちらに割くことになったため、唐宋変革論をめぐる共同の論集を刊行する準備は進められなかった。ただしそれに先行する内藤湖南論は日本の東方学会や中国の大学での講義などで報告している。しかしこの課題は、現在より専門の研究者も加え、新たな論集に集約する計画を進めており、2018年度の早い段階でしっかりした論集として刊行する計画である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 29 件)

氣賀沢保規、東アジアにおける「日本」の始まり——近年発見の百濟人「祢軍墓誌」の理解をめぐって、白山史学、50、pp. 1—22、2014年、査読なし

氣賀沢保規、房山石經事業中出現的「巡禮」與會昌滅法、「汉化・胡化・洋化——新出史料中的中国古代社会生活」論文集、pp. 403—420、2014年、査読なし

氣賀沢保規、房山雲居寺石經事業和“巡禮”唐代後半期の社會諸相與信仰世界、神聖空間：中古宗教中的空間因素、復旦大學出版社、pp. 232—253、2014年、査読なし

氣賀沢保規、内藤湖南の時代区分論とその現代的意義、(第六回日中学者中国古代史論壇論文集) 中国史の時代区分の現在、中国社会科学院歴史研究所・一般財団法人東方学会、汲古書院、pp. 295—310、2015年、査読なし  
氣賀沢保規、隋煬帝墓誌的発見及其意義——兼論墓誌銘復原案、『隋煬帝与揚州』国際學術研討會論文集、揚州市文物局編・主編冬冰、蘇州大学出版社、pp. 214—227、2015年、査読なし

氣賀沢保規、河北曲陽の八会寺仏教石經とその背景、隋唐仏教社会の基層構造の研究、明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院、pp. 1—84 +巻頭図版4頁、2015年、査読なし  
氣賀沢保規、隋煬帝墓誌の発見とその復元—唐初政治史の側面—、隋唐仏教社会の基層構造の研究、明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院、pp. 232—265、2015年、査読なし

氣賀沢保規、近代中國の石刻研究の礎を築いた人々『新中國出土墓誌』20周年に寄せて、『新中國出土墓誌』刊行20周年紀念 日中合同中國石刻國際シンポジウム(研討會) 論文集、pp. 3—11、2015年、査読なし

氣賀沢保規、關於百濟人《禰軍墓誌》中“日本”一詞的理解及其課題、古代동아시아石刻研究의 새로운 방향、pp. 31—53、2016年、査読なし

氣賀沢保規、隋代的云南及西南夷爨氏史事探析、紀念岑仲勉先生誕辰130周年国際學術研討會論文集、pp. 486—496、中山大学、2016年、査読なし

氣賀沢保規、隋時代の雲南——爨氏から南詔への節目の時代、雲南の歴史と文化とその風土、勉誠出版、pp. 83—115、2017年、査読あり

氣賀沢保規、雲南学の構築にむけて——その歴史的地理学的概観、同上、pp. 1—14、査読あり

氣賀沢保規、雲南史年表(稿)、同上、pp. 257—264、査読あり

氣賀沢保規、唐代敦煌的五台山信仰和“巡礼”、“唐代佛教社会的諸問題”国際學術研討會論文集、pp. 1—12、浙江大学、2017年3月、査読なし

櫻井智美、中国石刻關係學術雜誌資料目録(1991—2000年：宋遼西夏金元)(稿)、東アジア石刻研究、6、pp. 17—49、2015年、査読なし

櫻井智美・梶山智史、新刊紹介『東北大學附屬圖書館所藏中國金石文拓本集：附：關聯資料』、東アジア石刻文物研究、6、pp. 80—95、2015年、査読無し

櫻井智美、中国における蒙元時代(モンゴル時代)石刻研究の最前線、隋唐仏教社会の基層構造の研究、pp. 193—212、2015年 査読無し

石山裕規・櫻井智美・田畑成基・森本創 『皇元大科三場文選』「策」校注、明大アジア史論集、21、pp. 27—44、2017年、査読無し

梶山智史、稀見北朝墓誌輯録(二)、東アジア石刻研究、6、pp. 54-83、2015年、査読無し

梶山智史、北魏における墓誌銘の出現、駿台史学、157、pp. 23-46、2016年、査読有り

梶山智史、屠本『十六国春秋』序文輯録訳注(二)、明大アジア史論集、20、pp. 43-61、2016年、査読無し、2016年

梶山智史、書評：森部豊著『安祿山—「安史の乱」を起こしたソグド人』、唐代史研究、18、pp. 196-197、2015、査読無し

梶山智史、劉宋「爨龍顏碑」からみた南中大姓爨氏、雲南の歴史と文化とその風土、pp. 59-82、勉誠出版、2017年、査読あり

梶山智史、屠本『十六国春秋』序文輯録訳注(三)、明大アジア史論集、21、pp. 26-40、2017年、査読なし

梶山智史、稀見北朝墓誌輯録(三)、東アジア石刻研究、7、2017年3月、査読なし

[学会発表](計 25 件)

気賀沢保規、内藤湖南の時代区分論とその現代的意義、第6回日中學者中国古代史論壇(招待講演)、2014年5月25日、日本教育会館

気賀沢保規、房山雲居寺石經事業から見た唐代佛教社会—唐代後半期の「巡礼」とその社会諸相—、佛教と中國宗教研究における新しい視野と方法(NEW METHODS AND PERSPECTIVES ON THE STUDIES OF BUDDHISM AND CHINESE RELIGIONS)シンポジウム、2014年7月19日、復旦大学

気賀沢保規、新発見「隋煬帝墓誌」とその周辺、第7回東アジア石刻研究会、2014年7月26日、明治大学

気賀沢保規、從房山雲居寺石經事業看唐代後半期の社會諸相—關於「巡禮」與會昌滅佛—(招待講演)、台湾中央研究院歷史語言研究所講演、2014年10月7日、台北

気賀沢保規、隋煬帝墓誌的發現及其意義、「隋煬帝与揚州」國際學術研討會、2014年10月22日、揚州市・會議中心

気賀沢保規、唐代「巡礼」と會昌廢仏—房山雲居寺石經事業の展開に見る—、2014年度(第65回)佛教史学会學術大会、2014年11月29日、佛教大学

気賀沢保規、房山石經事業中出現的「巡禮」與會昌滅法、汉化・胡化・洋化——新出史料中的中国古代社会生活研討會、2014年12月19日、北京師範大学中国古代史研究中心

気賀沢保規、隋煬帝墓誌的發現及其意義(招待講演)、故宮博物院古文献研究所學術講座講演、2015年4月20日、北京市

気賀沢保規、隋代煬帝期聚会在洛陽的 외국인及其背景(洛陽学之一)(招待講演)、北京大学中国古代史研究中心2015年4月27日、北京大学

気賀沢保規、歷史上“日本”國號之發端和當時東亞的國際狀況：以近年發現的百濟人「禰軍墓誌」為線索(招待講演)、中國社會科學院歷史研究所、2015年5月26日、北京市

気賀沢保規、九世紀唐代的佛教信仰和“巡禮”：試探“巡禮”在東亞的起源(招待講演)、南開大学歴史系、2015年6月8日、天津市

気賀沢保規、“魚龍蔓延”的彼方：隋代煬帝政治和東西文化交流、博物學與寫本文化：知識—信仰傳統的生成與構造學術研討會、2015年6月20日、復旦大学

気賀沢保規、中国中古洛陽和洛陽学的意义、國際“洛陽學”的建構ワークショップ、2015年12月23日、洛陽師範学院

気賀沢保規、唐代敦煌の五台山信仰と「巡礼」—敦煌文書から房山石經まで—、内陸アジア出土古文献研究会7月例会、2016年7月10日、東洋文庫

気賀沢保規、中国中世史論の復権をめぐって、中国中世研究者フォーラム、2016年7月30日、京都大学

気賀沢保規、「隋代的云南及西南夷爨氏史事探析、紀念岑仲勉先生誕辰130周年國際學術研討會、2016年11月27日、広州・中山大学

気賀沢保規、隋代雲南与西南夷爨氏勢力(政權)、陝西師範大学西北民族研究中心講座、2016年12月27日、西安市

気賀沢保規、唐代“巡禮”和五台山信仰—從法門寺·房山石經·入唐巡禮記·五台山到會昌滅佛—、西北大学歴史学院講座、2016年12月30日、西安市

気賀沢保規、唐代敦煌的五臺山信仰和「巡禮」—從敦煌文書到房山石經—、第二屆幽州學研究班討論會、2017年1月14日、清華大学文化樓

気賀沢保規、唐代敦煌的五台山信仰和“巡礼、唐代佛教社会的諸問題”國際學術研討會、2017年3月11日、浙江大學

気賀沢保規、武則天和感業寺出家問題、浙江大學講座講演會、2017年3月11日、杭州市櫻井智美、南海神廟祭祀をとおして見る元代の広州、第8回東アジア石刻研究会、2016年12月3日、明治大学

櫻井智美、元代江南知識人にとっての「中国」、平成28年度東洋史研究会大会、2016年11月6日、京都大学

梶山智史、北魏国号考—石刻文献を中心に—、第8回東アジア石刻研究会、2016年12月3日、明治大学駿河台キャンパス

梶山智史、北魏国号考—石刻文献を中心に—、2016年度駿台史学会大会、2016年12月10日、明治大学駿河台キャンパス、

[図書](計 4 件)

気賀沢保規、隋唐佛教社会の基層構造の研究(編著)、明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院、全354頁、2015年

気賀沢保規、『新中國出土墓誌』刊行20周年紀念—日中合同中國石刻國際シンポジウム(研討會)論文集(編著)、明治大学東アジア石刻文物研究所、全120頁、2015年12月

気賀沢保規、則天武后、講談社學術文庫、全349頁、2016年11月、

気賀沢保規、雲南の歴史と文化とその風土  
(編著)、勉誠出版、全 269 頁+図版 8 頁、  
2017 年

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~ishiken/index.html> 明治大学東アジア石刻文物研究所

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

気賀沢保規 (KEGASAWA YASUNORI)  
明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進  
員 (客員研究員)  
研究者番号：10100918

### (2) 研究分担者

櫻井智美 (SAKURAI SATOMI)  
明治大学・文学部・准教授  
研究者番号：40386412  
梶山智史 (KAJIYAMA SATOSHI)  
明治大学・文学部・助教  
研究者番号：20615679

### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )